

佐用 新聞

このページでは「佐用新聞」と題した企画を展開します。姫路・西播地域をクロスアップし、みなさんが住む地域を題字にした新聞を掲載します。お楽しみください。

◎避難誘導用のスピーカーを付けて飛ぶドローン(JUAVACドローンエキスパートアカデミー兵庫校提供)
◎旧江川小学校の校舎を活用した「JUAVACドローンエキスパートアカデミー兵庫校」



発進 ドローンのまち

旧江川小学校の校舎を使う同校。元職員室の事務所に校長のほか、教官3人と臨時職員2人が勤務する。
受講生の世代は大学生から高齢者まで幅広い。大半が基礎を学ぶ「フライト基本技術コース」(料金25万円)を受講する。
同コースのカリキュラムは計4日。1日7〜8コマの授業は美技と航空法や氣象学などの座学がある。最終日の試験に合格すれば、国土省に飛行許可申請ができ、晴れて卒業となる。
学校のグラウンドをのぞくと、教官に教わりながらドローンの飛ばし方を練習する受講生の姿があった。
ドローンを使った防災、減災について研究している神戸大学大学院助教のヒノエイロ・アベウさん(35)。この日は、等間隔に並んだコーンの上空で幅約30cmの小型ドローンを上下左右に飛ばしていた。「肉眼で機体の向きを認識していることが大事なんだと気づいた」と話し、ドローンの動きを確めた。
応用コースに当たる「測量基本技術コース」の受講者にも話を聞いた。昨年春に同コースを修了した神戸市兵庫区の吉岡知恵さん(36)は測量会社で事務員として働く。人材不足を改善したいと、ドローンを使った測量を提案し、自ら資格を取るために受講した。
「ドローンを使えば、女性でも大変な現場作業ができそうだと思う。操縦は難しかったが、何とか卒業できた。今後、実務に取り入れたい」と展望を語る。
開校から2年。卒業生は1500人近くに上る。教官を通して受講生たちが交流し、「同窓会」が開かれたこともあるという。前田稔朗校長(73)は「新しいことがしなくて学びに来る人も多い。情報交換や近況報告を兼ねて集まる機会は今後もあるだろう。佐用町からドローンの活用が広がればうれしい」と話す。

防災の研究、測量資格取得へ…県内外から受講生



教官(右)の指導を受けてドローンを飛ばす練習をする受講生(左)。佐用町豊福

2017年に開校した佐用町豊福のドローン操縦士養成校「JUAVACドローンエキスパートアカデミー兵庫校」。国土交通省の認定を受け、県内外から受講生が絶えない。どんな人が、何のために学びに来るのだろうか。(勝浦美香)

旧小学校校舎を活用 操縦士養成校

■ 校長・前田稔朗さんに聞く 卒業生は、新たな技術広めて。



ドローンの可能性について語る前田稔朗校長

「佐用を『ドローンのまち』に」。同校が開設時から目標に掲げる言葉だ。

自然豊かな佐用町は都市部や住宅地に比べて制約が少ないためドローンを飛ばしやすい町なのだという。広大な土地や、測量のための飛行練習に使える山もある。前田校長は「数あるドローンアカデミーの中でも恵まれた環境でしょう」。

従来の農業散布や土地の測量に加え、将来的には荷物の配送などドローン活用の可能性はまだある。「高齢化、過疎化

の進む地域だとさらに果たせる役割は大きい。卒業生は地域に新たな技術を広めてほしい」と前田校長は期待する。

一方で、安全面への配慮も訴える。「(落下や衝突などの)『万が一』を考えると怖くなる。多岐にわたって活用され始めたからこそ、危険の予測や何か起きた際の対処法を身に付けることはいっそう重要だ」と力を込めた。

建物点検、PR撮影… 多彩な事業 請け負いも

同校は操縦士養成だけでなく、行政や教育機関、企業からの委託事業も担う。

中心はドローンの空撮機能を生かした事業。害獣の監視、神戸マラソンなど大規模イベントのPR動画撮影など内容は多彩だ。

最近、マンションや橋など大きな建造物の点検も受託。需要に応えるための拠点として、同校を運営する建材販売会社「T&T」(赤穂市)は昨年、

東京都に営業所を新設した。都内での点検作業ではまず、ドローンを飛ばして対象のビルやマンションをさまざまな角度から撮影。そのデータを佐用町の同校に送られ、社員が傷跡やひび割れの大きさをミリ単位で解析する。さらにニーズが高まり、新たな雇用の場につながる可能性も秘める。

防災分野でドローンが活躍する事業も増加。昨年実施した佐用町の水害救助訓練でも、ドローンで被害状況を調べ、取り付けられたスピーカーを通して上空から避難誘導した。ほかの地域でも同様に活用しており、スピーカー付きのドローンは特許を申請中という。



勝浦美香

昨年友人の結婚式に出席した時のこと。ブーケトスをす

ぶりに感じたが、今回の取材では日常の中でもっとも身近な存在になる可能性を感銘した。いつの日か、インターネットで頼んだ荷物が、ドローンで届けられることがあるかもしれない。初めてすくそばで幅2分のドローンを見ながらそんな未来を想像した。

次回15日は「はりま文化新聞」です